

意味の理論の主張としての観念論と反実在論

富山豊（千葉工業大学）

その昔、カントは自身の「観念論論駁」のなかで、論敵をデカルト流の「蓋然的観念論」とバークリ流の「独断的観念論」に分けていた。一見するとこの両者は物体に関する言明をどれだけ強く否定するかという主張の強さによる分類にも見えるが、じっさいにはこの両者はその根拠づけの議論において大きく異なっている。つまり、デカルトの観念論が知識の「確実性」に焦点を当てた認識論的議論に依拠しているのに対し、バークリの観念論はむしろ観念ならざる物体という概念そのものの整合的な理解可能性に関わるものであり、物体について語る時我々はじっさいには何について語っているのか、という意味論的議論に依拠するものである。さて、フッサール現象学もまた、ある種の「観念論」を主張するものとして知られる。彼の観念論は少なくとも中期現象学まではデカルトの歩みをなぞっているように見え、したがって世界についての不確実な信念を遮断して絶対的な明証を求めるものであるかに思えるが、彼の初期・中期志向性理論から辿り直すならば、むしろその観念論はバークリと同様の意味論的な観念論として自然に理解することができる。本提題ではダメットの検証主義的な意味理論を参照軸としつつこのことを示し、「超越論的観念論」と「反実在論」の可能性について検討したい。